社会貢献

沖縄県の防災力向上のための地域社会との連携

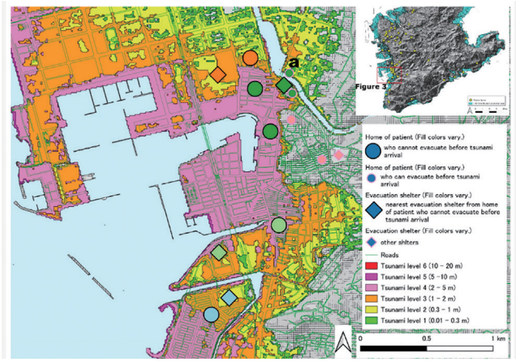
保健学科
関口　浩至　成人・老年看護学講座　准教授

沖縄県は地震など台風以外の災害は少ないイメージですが、2022 年、政府の地震調査委員会は今後 30 年以内に沖縄・南西諸島周辺の琉球海溝を震源とするマグニチュード 7 クラスの海底地震が発生する確率を 90% 以上と予測しています。そのような中、今年 4 月 3 日の台湾東部を震源とする地震とそれに伴う沖縄県地方への津波警報発令は、皆さんの記憶に新しいと思います。津波災害の対策は強固な堤防や津波避難ビルの構築などハード面と、実際に逃げる人々がどのように安全に避難し、避難所で健康に避難生活を過ごすかという人の身体やその心に関するソフト面の取り組みが必要です。保健学研究科・保健学科では特にこのソフト面、とりわけ災害時に支援が必要な災害時要配慮者と呼ばれる人々（高齢者、障がいをもつ人、妊婦さん、子ども、外国人など）の避難行動や避難所での健康管理などの調査や研究、社会実践活動に取り組んでいます。

調査研究では、呼吸器疾患など肺に障がいをもつ方々が自宅からどれくらいの距離を避難できるのか、6 分間歩行テストという病院で行う検査に基づき地理情報システム（GIS：Geographic Information System）を利用して明らかにしました。さらに現在、大学院生が高い建物への垂直避難を組み込んだ、災害時要配慮者の方々のための新たな避難方法の開発に取り組んでいます。

当教室では教員が防災士の資格を取得し、沖縄県内各地域で行われている防災訓練のお手伝いにも参加しています。 また、学生も参加できる「保健学科防災ボランティア同好会」を結成し、公民館などを訪問して地域のお手伝いができるようにすすめています。

沖縄本島だけでなく、離島地域の中学校と協力して、中学生が地域の防災リーダーとして活躍できるようにリモートや対面授業を利用した「防災授業」を開講するなど地域に根差した実践活動を行っています。



GIS研究

防災士活動

防災授業（離島中学校）

国際交流

アジア・アフリカ・大洋州の学生との交流や海外で研究をしませんか

保健学科
野中　大輔　母子看護学講座　准教授

医学部保健学科とチェンマイ大学看護学部との間では、学生間の交流が 20 年以上続いています。研究・教育の交流・協働強化を目的に、チェンマイ大学看護学部との交流協定を締結しました。2019 年までほぼ毎年、7 月にチェンマイ大学の学生が琉球大学を訪問し、9 月に琉球大学の学生がチェンマイ大学を訪問していました。新型コロナウイルス感染症拡大により、対面による交流は一時中断しましたが、来年から再開の見込みです。

琉球大学医学部とラオス国保健医療部門との交流は 30 年以上続いています。医学部・医学研究科・琉球大学病院から多数の専門家がラオスを訪れ、公衆衛生プロジェクト、中核病院での技術指導、チャリティー・オペレーションの実施、学校地域歯科保健プロジェクトなどを現地のカウンターパートと共に実施してきました。2023 年から、寄生虫疾患対策のために、ラオス国立パスツール研究所と共同研究を進めています。同年に、JICA 草の根・貧困僻地郡における女性のエンパワメントによる母子保健強化プロジェクトを開始しました。2024 年には、医学部生がラオスを訪れ、プロジェクトの現地視察や現地の医療系学生と交流しました。

保健学研究科は 2021 年に JICA 開発大学院連携に登録され、アジア、アフリカ、大洋州からの留学生を多数受けれています。また、世界から保健医療実務者が集まってくる JICA 課題別研修に対して、保健学研究科は技術協力をしています。留学生と交流したり JICA 課題別研修に参加したりすることで、沖縄にいながら世界各国の保健医療事情や文化について学ぶことできます。保健学研究科大学院生の中には、修士研究や博士研究のために海外で調査をおこなう学生もいます。医学生の中でも、卒業研究のためにラオスやインドネシアなどの海外で調査をおこなう学生もいます。

チェンマイ大学看護学部学生との交流

保健学研究科大学院生による海外フィールド調査

医学部生によるラオス現地視察